

# おおぞら

No.19 (136)

社会福祉法人 聖隷福祉事業団  
総合病院 聖隷三方原病院  
聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558  
静岡県浜松市北区三方原町3453  
TEL 053-437-1467

発行責任者 荻野和功  
編集者 横地健治

2010年1月20日

## 重症心身障害の内的世界

所長 横地 健治

個々の重症心身障害児(者)に即した質の高い生活を提供するのが私たちの施設の業務です。そのためには、その人にとって、何が質の高い生活なのかを決めることが前提となります。しかし、これを決定するのは難しい課題であり、これこそが重症心身障害に関わる職員の専門性としてもっとも重要なことです。

その人にとって良い生活とは、本人がうれしいと感じ、満足感があるものでなければなりません。これに対し、単純な快楽の感覚が得られればよしとするのではいけません。これでいいのなら、本能を満たすだけのものを追い求めることになりません。さらに、快の感覚をもらす薬物・嗜好品に依存する危険にもつながります。

新生児から老人までのヒトの一生の中では、うれしいこと、満足感のあることは大きく変わるでしょう。年齢の違いの中でも、ヒトとしての発達を終わった以後の変化は、発達し続けている期間に比べれば、わずかな程度でしょう。社会通念上は、発達が完了した以後は成人であり、それ以前は小児(児童)と区分けされています。この区分けは、良い生活を考える上でおおむね妥当だと思えます。ただし、発達の途中で、新生児期・乳児期は発達が急であり、その後の発達程度は鈍ってきます。

古くは、赤ちゃんは、目も見えない、声を聞いても何もわからないと思われてきました。近年は、胎児期から新生児・乳児期と連続的に発達する存在であるとされています。何もわからないのではなく、こまではわかってはいるが、これから先はわからないといった理解がされるようになってきました。

生活の中の行為・出来事に対し、うれしい、満足感があると感じるには、その人がそれをわかっているだけではありません。わかっているだけでは

は不十分で、それに対して、関心・興味といった思い入れがなければなりません。これが正しく認識されてこそ、良い生活につながる生活行為・活動が提供できることとなります。

この認識を得るためには、その人が、自分の周りの物や出来事をどの程度理解できているのかを知る必要があります。もちろん、自分と他者の区別がついているかも知れませんがありません。実際的には、その人の理解能力は、何歳相当なのか、あるいは生後何ヶ月の乳児相当なのかを推測することから始めるべきと考えます。もちろん、健常児の発達経過と脳障害による知的障害の軽重は同じではありません。これは、こまではわかっているが、これから先はわからないといった段階付けが、正常発達と個々の脳障害程度では異なるということです。極端な例で言えば、顔貌の理解ができなくて、文字が読めることは、発達期の健常小児ではあり得ないが、脳障害ではあり得るといったことです。こうした違いは十分認識した上で、その人の理解程度は、どの年齢の正常発達段階に近似しているかを発点にすればいいと思います。これが

「発達年齢」の考え方です。

知的能力の分野別に発達段階を知り、それが各分野で大きく異なることがなければ、その人の発達年齢を想定することができず(各分野で差異が大きければ、このやり方は放棄します)。そうすると、その人の内的世界は、その発達年齢の健常児の内的世界と近似していると仮定します。有意な言語理解がなければ、その発達年齢は一歳未満ということになり、健常乳児相当ということになります。重症心身障害の成人の多くは、有意な言語理解がないので、その内的世界は乳児と近似していると考えます。そうすると、成人を子ども扱いするとして抵抗があるかもしれません。人としての尊厳は健常成人と同等であるが、その人の良い生活を立案するためには健常乳児を参考にすればいいということなのです。言語表出しない乳児の内的世界も未知の世界です。しかし、健常乳児がどんなことを喜び、どんなことに興味を持って行動するのかといった経験はたくさんあります。まず、これらを参考に、その人のうれしいこと、満足感のあることを決めていけばいいと考えます。前述したように、正常発達